

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2003

1

0-0401-006947-6

第102巻 第1号 日本幼稚園協会

『個と集団が育ち合う園生活』 (全5巻)

編著者 柴崎正行 (東京家政大学教授)
川合貞子 (東京家政大学助教授)
大豆生田啓友 (関東学院女子短期大学講師)

好評
発売中

- 第1巻 『0・1歳児クラス運営のすべて』
- 第2巻 『2歳児クラス運営のすべて』
- 第3巻 『3歳児クラス運営のすべて』
- 第4巻 『4歳児クラス運営のすべて』
- 第5巻 『5歳児クラス運営のすべて』



判型 B5判 各224~248ページ
定価：本体各1,900円+税

●本書の構成と特徴

- ①生活する姿から
その月にあった子どもの生活する姿から様々なエピソードを提示。
- ②生活の見通しと保育者の願い
その月の生活や遊びの方向性をどう見通したかを〈読み取り〉〈願い〉〈援助〉の視点で具体的に書きあらわした。
- ③指導計画の作成と見直し
個と集団の育ち合いを生み出す実践事例と結びつけたその月の指導計画を示した。
- ④保育のアイデア
育ち合いを生み出すために知っていること、配慮することを具体的に示した。
- ⑤編者のコメント
以上の実践記録に対して、編者がどう読み取ったか、個と集団の育ち合いを生み出すためのポイントについてコメントした。

個と集団の育ち合いを生み出すための指導計画を求めている保育者のみなさんに贈ります。

一人ひとりの子どもを生かしながら、クラスもスムーズに運営したいという保育者の切実な願いに
応えるための参考書です。

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第102巻 第1号



幼児の教育 目次

— 第一〇二巻 第一号 —

© 2003
日本幼稚園協会

ある日 (4)

巻頭言 保育に「子どもの視点」を 森上 史朗 (6)

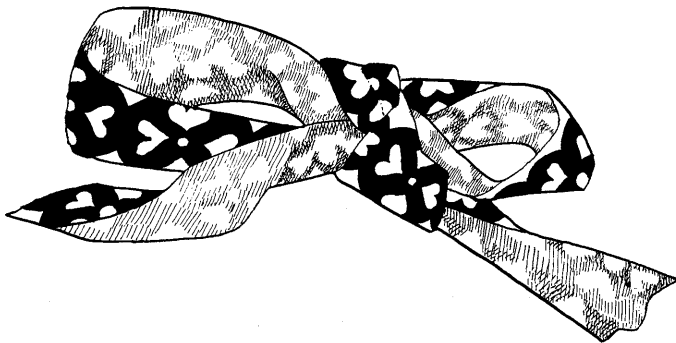
子どもと出会う(1) 子どもにとっての保育室 岩田 純一 (11)

子どもがいる風景(2) 今、子どもたちのあそび場は.....

— マンハッタン子ども博物館 — 小林 美実 (20)

障害をもつ幼児の保育(6) — この子と出会ったとき —

手を使うこと その一 津守 真・津守 房江 (29)



生きものの共存の畝間から(9)

無肥料、無耕耘栽培を“自然”に学ぶ……………徳野 雅仁…(36)

日常生活の中のことからだ……………宮田 敬一…(38)

ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む

(4)ブルデュー社会学における身体性と実践の論理……………安田 尚…(44)

つながりを生みだすもの・こと……………伊集院理子…(56)

表紙絵／南塚 直子

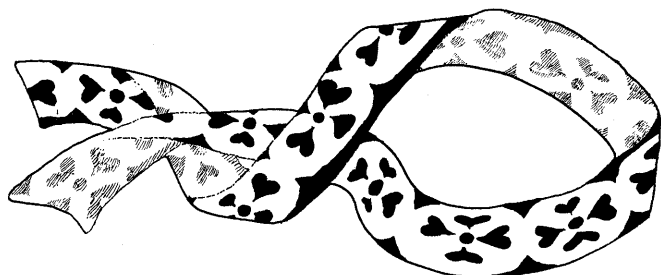
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「うらおもて」

編集委員／田代 和美・高橋 陽子・佐藤 寛子

編集部／仲 明子



ある日





撮影・平野 清

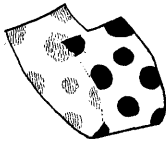
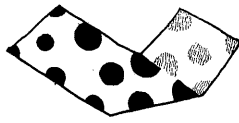
巻頭言

保育に“子どもの視点”を

森上 史朗

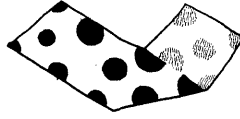
最近「保育の見直し」とか「新しい保育の創造」ということが強調されている。そのため、保育に関する法令や通知、制度などが改変されたり、あるいは国及び地方自治体から様々な新しい方針がうちだされたりしている。しかし、それらの多くはシステムや大人の都合が優先し、保育の質の確保や子どもの発達にとつての意味を問うという“子どもの視点”が欠落しているように思われる。そこで、最近の保育のさまざまな動向について“保育の質”や“子どもの視点”から検討してみることにした

い。



第一には規制緩和の動向についてである。平成十年十二月に国の規制緩和委員会は中間報告をまとめ、保育園・幼稚園などの保育施設の設置主体について、民間企業や各種団体などの多様な事業者の参入を認め、それらの事業者間の対等な競争を通じて保育施設利用者の選択の幅を広げること及び市場原理の導入によって、多様な保育ニーズに応えるサービスを安価に提供できるようにすることを提言した。また、今の基準にはみえない駅型保育施設などの無認可保育施設をいわゆる“認証保育所”として認め、補助金を支給するとか、人件費の節減のために、非常勤や短時間保育士（パート）などを増やすことなどを提言している。規制緩和を推進することは確かに待機児の解消や経費削減に役立つという面はある。しかし、子どもの発達を促す経験の確保とか保育の質の確保ということからすると、そこには大きな問題がある。

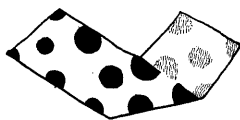
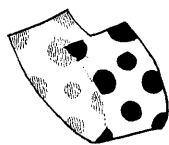
いうまでもなく、幼稚園や保育園は、単に保護者に代わって乳幼児を預かり、つづがなくその日を送ればよいというだけのところではない。そこは子どもの発達を促すための豊かな環境が用意されており、また、自分とは異なる他者との出会いがあり、相互に刺激し合い、育ち合う仲間関係なども存在している。さらに、そこには、一人一人の子どもの発達に応じて適切な援助ができる専門性を備えた保育者がいて、その役割を適切に果たしている。ところが現在、さまざまな乳幼児の発達の危機が指摘されているにもかかわらず、規制緩和によって認証された駅型保育施設などのなかに



は、室内の人工的、無機的環境での生活のみで、自然とのかかわりや、直接的体験をもつ機会は無に等しいものがある。また、企業参入によって設置されたある保育施設では、全員が若い一年ごとの契約職員であり、保育室ではカセットコーダに合わせて紙芝居をめぐっているだけというような保育が行われている。これでは想像の世界が豊かに育っていくことなど、到底期待できない。

専門性を備えた熟達した保育者の必要性について、津守真氏が『保育学研究』の最新号のなかで次のように述べていることは耳を傾ける必要がある。すなわち、「保育園や幼稚園で、このごろ子どもの様子がおかしいと思ひ、先生がいつもその子をそばに付けて、おぶったり抱いたりするうちに、その子の家族に家庭問題が生じていることを知ることとは少なくない。保育者が、小さな行動から子どもの危機を察知してそれに応え、大きな問題となるのを未然に防いでいることは多い。そのような例は数え切れない。乳幼児を保育する人は瞬時も気を抜くことができないところに乳幼児の保育の特色がある」と。

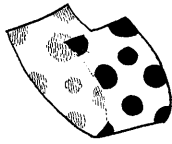
第二には最近の保育現場では、預かり保育、延長保育、早朝保育、休日保育、一時保育、子育て支援等、実に多様な保育ニーズに応えることが要求され、保育者にゆとりがなくなってきたことである。そのため、保育サービスのメニューは多く用意されているのだが、その内容は実に乏しいものになっていることが多い。例えば「預



かり保育“や”延長保育”も、正規の保育ではないという不思議な発想のもとに、子どもたちを一室に集めてテレビを見せたり、いつも同じ玩具で遊ばせておくというよきな保育をよく目にするところがある。これとは反対に、この時間を有効に生かすということで、延長保育、預かり保育など、時間に全員一斉に英語や文字の指導、体操指導などに取り組まれているところもある。これなども乳幼児の発達に必要な経験や、生活のリズムと連続性を考えたとき、大きな問題があるといわなくてはならないであろう。

第三には最近の幼児数の減少や国の「地方分権化施策の進展などに伴って、全国各地で保育施設の統廃合が行われたり、幼保の一体化施設などが設立されたりしていることである。

東北のある村に、最近その地域全体で保育施設を一カ所に統合した豪華な幼保一体化施設が出来ている。子どもたちは村のあちこちから通園バスで送られてそこに集まってくる。そのため、地域では昼間は子どもの姿を全く見かけることはないし、子どもの声も全く聞かれない。また、バスの送迎であるため、その日の子どもについての情報が親と保育者の間でかわされるといっても全く全くない。これでは保育施設と家庭が手を携えて子どものすこやかな育ちを考えていこうという気運を妨げてしまう。今後の少子化の進展を考えたとき、安易に統廃合に向かうのではなく、これからの保



育施設は小規模であってもよい、地域の子育てセンターとして位置づき、「ここに園があつてよかった」「この子どもたちを園と保護者と地域全体で見守り、育てていく」という気運を盛り立てていく方向に向かうべきではないか。

また、幼保の一体化ということも制度論が優先するのではなく、「保育の質」の観点からの検討が必要であろう。たとえば、短時間児（幼稚園対象児）と長時間児（保育園対象児）を単に一緒にすればよいというものではなく、両者が同じ施設の中で生活する中で、両者の生活リズムの違いに配慮した一日の生活のデザインが考慮されているか、また、短時間児と長時間児との結びつきを促す保育上の工夫がどのように行われているか、両者が心理的に分断されることがないかどうかなどの検討が必要とされるよう。さらに、幼児とクラス担任との結びつきやクラスの枠を超えた他の保育者と幼児との結びつき、あるいは保育者同士のチームワークの在り方などが問題となる。そうした「保育の質」や、「子どもの視点」から検討すると、制度的には全国的には高い評価を受けている一体化施設であっても、問題がある場合が多い。

なお、最近「新しい保育の創造」ということで「チーム保育」とか「特色ある保育実践」ということが強調されているが、これなども、「子どもの視点」が欠落すると、かえって、保育の形骸化をもたらすことになる。

(子どもと保育総合研究所)

子どもと出会う(1)

子どもにとっての保育室

岩田 純一

ときに子どもは、不可解な行動を見せることがある。それは今まで皆と一緒にいた子どもが急にカーテンのうしろや壁と本棚の狭い隙間、考えもつかない隅っこの隙間などに入って、別に何をするでもなくただじっと身を潜めているといった行動のことである。しかも、それはどの年齢でも同じように出現

するわけではなく、一般的に三、四歳の頃にはよく見られるが、年長児にはあまり見られなくなる。ごっこ遊びやかくれんぼうならいざしらず、われわれにとってたまことに奇妙な光景に映る。保育者であるなら一度は目にされたことがあるだろう。いたい、なにゆえに子どもは隅っこの狭い隙間を好む

のであろうか。

それについてはいろいろな解釈も可能であろう。

精神分析風には、それは子宮帰願望の現われであり、子宮に似て狭く薄暗い場所が気分の落ち着きや安定をもたらずといった解釈がなされるかもしれない。また子どもにとって隙間そのものが、そこに自分の身を滑り込ませられるかどうかを確かめるといった行動を引き起こす、いまや流行語の「アフォードする」という解釈がなされるかも知れない。しかし、ここではもつと違った発達の観点から、子どもにとつての保育室の隙間がもつ意味について考えてみよう。

保育室という場所は、保育者のもとに子どもたちが一緒に活動するという、いわば公共の空間である。そこでは、じぶん勝手な振る舞いが制約され、じぶんだけの勝手な時間や空間をもつことは許されない。その意味では、子どもにとつての園は、じぶ

んの家のようには自由にならない場として登場する。子どもが園生活に適應するためには、そのような場になじまなければならないのである。ところが、はじめに園にやってきた子どもにとっては、まさにこのことが大きな課題となってくるように思われる。その集団で、じぶんの思うがままをより強く抑えることが求められるお集まりの時間に見あたらず、探すと隙間に身を潜めている三歳児の姿は象徴的でもある。

そのような子どもにとって、部屋の隅っこにみつけた隙間は、まさに公空間から開放された、じぶんだけの私空間なのではなからうか。

タテマエとホンネ

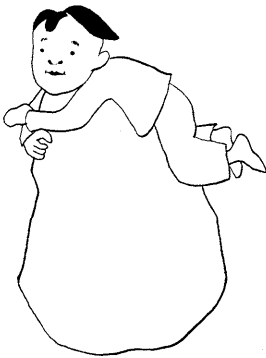
四歳の頃になると、しだいに皆と一緒にタテマエの公空間に身をなじませるようになってくる。この頃は、意識の上でタテマエとホンネを区別して、じ

ぶんのホンネの部分を調整しながら、タテマエ（皆の約束事やきまり）にしたがって振舞えるようになってくる。しかし子どもによっては、まだタテマエにしたがって振る舞っていても、タテマエの支配する場から身を退いて、ホンネ（自由なじぶん）になれる場所をみつけようとするのがみられる。それが、まさにタテマエ空間のなかに内なる私のホンネ空間としての隙間を作り出し、そこに身を潜ませるような行動となって現れるように思える。

しかしながら、年長になる頃には、タテマエが支配する公空間にうまく身をなじませながら活動できるようになる。保育室という公空間に覚悟をもって棲もうとするようになってくるのである。したがって、もはやそれまでのように狭い隙間に身を潜ませるといった行動はみられなくなる。もし子どもが隙間に身を潜ませているとすれば、それはごっこ遊びやかくれんぼといった遊びのなかである。

保育室というタテマエの公空間に身をなじませていく過程で、ホンネのじぶんになれる私空間が、まさに皆の目から逸れた隅っこの薄暗い隙間なのである。もちろん、年少や年中児であっても、すべてがこのような行動を示すわけではない。それまでとは異質な秩序化・管理された保育の場になじめない子、なじみにくい子どもが、その公空間のなかにあつて我がままになれる隙間を求め、そこに一時的に心身を潜ませるのである。

また、じぶんの心理的な不安や心配事を抱えているとき、この頃の子どもでは、皆の公空間から身を



潜ませるといったこともみられる。心ここにあらずで、集団的な場に身をなじませるところではなく、じぶん一人になれる私の隙間を求めるのである。ある女子大学生の述懐だが、年中児のとき、母親の長い入院で、その不安や淋しさもあって集団での活動どころではなく、皆から外れて暗い狭い隙間にじっとしていた思い出があるという。

このようにみると、部屋にできた隙間は、タテマエに合わさなければならぬ心理的な疲労や緊張からの一時的な逃げ場となったり、不安なじぶんの心を癒したり、立て直す場となるのかもしれない。

『おしいれのぼうけん』

保育室のなかには子どもが身を潜ませるための隙間だけでなく、子どもにとっては非日常的な空間もある。そのような保育室の空間が子どもの育ちにとってどう意味を鮮やかに描き出した絵本がある。

それは『おしいれのぼうけん』（ふるたたるひ・たばたせいいちさく 童心社）という長く読み継がれてきた絵本である。すでにご存知の方も多いとは思いますが、まず絵本の内容を要約して述べてみよう。

最初の出だしは、見開きのページで「ここはさくらほいくえんです。さくらほいくえんには、こわいものがふたつあります」といった意味深長なことから始まり、日常の園生活の様子が描かれていく。ある日、さくら保育園のさととあきは、午睡の時間にミニカーの貸し借りでもめ、すでに寝ようと横になっているともこやかずおの足や手をふんづけてしまう。それを見て、みずの先生が怒り、二人を押し入れの上段と下段に入れてしまう。先生は二人が「ごめんさい」と言うのを待つが、なかなか謝らないので、押し入れから出すに出せない。

そこから二人の冒険がはじまるのである。押し入れのなかは、夜の山と夜の海。二人が手ににぎって

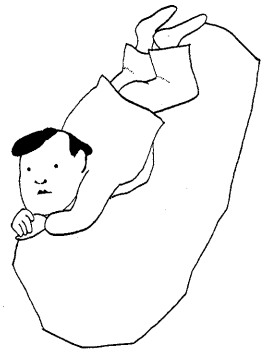
いたミニカーとミニ機関車に乗って街に向かっている。二人が思わず手から離れたミニカーや機関車は、ひとりりでトンネルに入っていく。それを追いかけていくと、そこで（人形劇のなかで怖いと思っていた）ねずみばあさんがほんとうに現れ、お伴のねずみたちに食べられそうになる。それをやつと逃れてトンネルの出口へ走ってようやく外に出る。ところが、そこでまたねずみばあさんやねずみたちが待ち構えており、さらに下水道へ逃げ、丸たん棒にかまって流されていくが、結局はつかまってしまふ。ねずみばあさんは「あやまるならたべもしないし、このちかのせいかからもだしてやる」と言う。二人は謝りそうになるが、「ぼくたち、わるくないもん。ごめんなさいなんて、いうもんか!」と断る。「ようし。それならおまえたちをわしのねずみにしてやろう」とねずみにされそうになり、ねずみたちがまさにとびかかろうとしたとき、向こうから

ミニカーとデゴイチが光をつけて走ってくる。それに飛び乗ってふたりは逃げる。ねずみばあさんたちは強いライトで「たすけてくれ!」と逃げ出してしまふ。

二人とも地下の世界から、空に浮かびあがっていく。気がつくとき二人は押し入れのなかでデゴイチとミニカーをもったままうとうとしていたのである。汗ぐつしよりの二人は「あーくん。すごいぼうけんだったなあ」「へいきだよ、さとちゃんどてをつないでいたからね」と、夢のなかの冒険が嘘ではなかったことを語り合う。気がつくとき、なかなか二人が「ごめんなさい」と言わないものだから、押し入れから出す機会を逸してしまった先生は、押し入れを開けて「ごめんね、さとちゃんのいったとおり、おしいれのそとでかんがえてもらったほうがよかつたな」と言う。みんなが「ね、ね。おしいれこわくなかった?」とよってくる。さとしとあきはあか

くなって、ともことかずおに頭をさげ、「さつきはふんじやってごめんね」と素直に謝る。それから押し入れが怖い所ではなくなり、押し入れはみんなの遊び場所となる。最後の見開きページには「さくらほいくえんには、とてもたのしいものがふたつあります。ひとつはおしいで、もうひとつはねずみばあさんです」と括られている。

この絵本のテーマは、心の変化であり、見開きの変化が象徴的である。この絵本には作者のある思いが込められているように思える。さて、それは何であらうか。その思いは、絵本のなかの「ごめんなさい」ということばに込められているのではなからうか。じぶんたちは悪くないと思っているから「ごめんなさい」が言えず、押し入れから出してもらえない。ねずみばあさんに食べられそうになっても頑として「ごめんなさい」を言わなかった子どもが、二人で手をとって合って逃れた夢の経験をくぐり、押し



入れの外（現実）に戻ったとき、今度は素直に「ごめんね」と謝ることができたのである。先生やねずみばあさんが、あれほど脅しても「ごめんなさい」と言わせられなかったことばを、子どもはじぶんから「ごめんね」と言えるようになったのである。じぶんたちは悪くない、しかし怖い押し入れから出るには謝らねばならないという心の葛藤が、このような夢をみさせることになったのであらう。そして、夢という内界での冒険をくぐるなかで、「ごめんね」と言えるほど心が変化したのである。

さらにこの絵本でもう一つ興味を惹かれたところ

がある。それは押し入れから外を垣間見るといふ奇妙な感覚である。(あとで先生に塞がれてしまうが)押し入れの戸に穴があいており、そこから外の光がもれてくる。その穴から、片目をつぶって見ると、いままで経験したことがないような奇妙な感覚が「ふふ、おもしろいね」と語られる。なぜであろうか。見慣れているはずの光景ではあるが、それを外から光景として見たことはなかったからである。それは透明人間の視点である。じぶんは皆から見られないで、皆の世界をのぞき見るといふ奇妙な感覚体験である。のぞき見るといふ独特の感覚体験である。

身を潜めるための隙間も、ときにそのような感覚を体験させてくれる。ある五歳児が、仲間とのいざこざか何かでバツが悪くなり、身の置き場がなくなり部屋のスマックかけのうしろ(隙間)に身を隠していた。ところが降園の時間になり、その子どもが

見あたらないのがわかり皆で探しあてたが、見つけた子どもは先生に「おもしろかった、足音こえて面白かったわ」と言ったそうである。隙間から皆の足音をそと盗み聴くことも、のぞき見るのと同じように今までは違った奇妙な感覚を覚えさせたのである。今じぶんが不在となった皆の場所を、皆が不在の「私だけの場所」から盗み見る、盗み聴くという奇妙な感覚体験である。まさに、子どもにとっては、「おもしろいぼうけん」は、新たな「知覚」の冒険をも可能にしたのである。

心の寄り道

『おもしろいぼうけん』では、押し入れのなかという私化された空間と、夢というきわめてプライベートな時間が重要な役割を果たしている。この絵本から、寄り道ということばを連想してしまう。一般的には子どもの寄り道はあまり奨励されないが、寄り

道にもそれなりの効用や意味をもつように思われる。寄り道は、まさにプライベートな空間や時間を作ることである。じつは「寄る」の意義には、「縫る」と「撰る」といった二つの正反対の意味が含まれ込まれているようである。前者は、文字通りに糸が縫れてしまう、こんがらがるといった意味であり、後者は縫れてもつれた糸を一本ずつ選び直すという意味である。したがって、「寄り道をする」には、縫れてもつれた糸を選び出してすっきりさせるという働きを示唆しているのではなからうか。寄り道とは、感情のもつれや葛藤を、じぶんなりに整理したり、立て直したりすることができる空間や時間なのではなからうか。そのように考えると、全国どこにもある「寄り道」という名の酒場の由緒も納得される。サラリーマンが酒場に寄り道をして、その日にあった会社でのうさを晴らして帰宅するのである。

その意味では、絵本の中の狭く真つ暗な押し入れは、子どもにとってじぶんがじぶんの心（内界）に向き合い、縫れた心（葛藤）を解きほぐす「私」の空間や時間になったのである。それは夢という形で自律的な心の動きをもたらし、それがときとしてこのような心の変化をもたらすのである。二人が手をとって危機を乗り越えていくという夢をくぐりなかで、さとしとあきはミニカーをめぐる縫れていたじぶんたちの気持ちを解きほぐし、「ごめんなさい」と言うことをめぐる葛藤を解きほぐしたのである。

押し入れ、それは光のない外部に閉じられた空間であり、その暗闇は一切の形を消失させてしまう。形のみえない世界、日常とは異なる混沌とした無定形の闇の世界である。光のもとに仕切られた秩序だった空間とは異質であり、そうであるからこそ、現実の秩序に制約されることなく、じぶんの内界へ

と導かれやすくなるのであろう。暗い押し入れがそのような「私の世界」への冒険を生み出したのである。闇の異界であるからこそ実際にはいないいねずみばあさんが登場し、最後にはライトという秩序をもたらす光に照らされて消えてしまう。そして二人は現実（外）の世界へと戻ってくるのである。その意味では、子どもにとって押し入れという非日常的な場所は、暗くて恐いけれども、心の寄り道を許す私の空間となったのである。絵本の最後に、押し入れのなかで皆が楽しそうに遊んでいる絵が描かれている。この部分には少し不満が残る。それは、せっかくの心の寄り道ができる密かな場所、じぶんの闇の世界への密かな入り口を一つ失ってしまったからである。

おわりに

今まで述べてきたことは、子どもにとっての保育

室に思いをめぐらせるとき、いろいろな示唆を与えてくれるように思われる。たしかに整備され、効率的な保育室の環境が、子どもの活動にとって重要であることは言うまでもなからう。しかし秩序だつて、四方が隅々まで照らし出されているだけではなく、他方ではじぶんの心を癒し、そつと立て直したり、じぶんの心の寄り道を許すような密かな場所を仕掛けとして保育室のなかにいかに作れるかということも大切になるのではなからうか。それは、保育室のなかのもう一つの必要な環境の設定であるように思われる。

（京都教育大学）

子どものいる風景(2)

今、子どもたちのあそび場は……

— マンハッタン子ども博物館 —

小林 美実

子どもたちが街中の路上やちよつとした空き地で群れてあそぶ姿をとんと見なくなってしまった。今や道という道は車に占拠されてしまっている。人間はいつも自動車や自転車に気を使いながら歩いている。空き地は持ち主の自衛上、しっかり囲われている。油断しているとゴミ捨て場化するだろうし、もしそこであそんでいた子どもに事故が起きた時に

は、管理責任が問われるだろう。いやな世の中になつたものである。それだけではない。子どもをねらつた犯罪が増え続けている。今や日本でも欧米並みに、自宅の庭でも子どもを一人で外であそばせられない。おまけに日本の都会の住宅には、欧米によくある裏庭や中庭がない。どうしても建物の中であそばせてしまう。戸外で子どもの姿を見かけること



が減った理由は、少子化ばかりではない。大人も子どもも安心して暮らせない社会になってしまった。

しかし、子どもの姿を見るのは楽しい。ほっとする。時にはいらいらしたり、悲しくなるときもあるが。前回に続いて、「子どものいる風景」というテーマでしばらく私が出会ったいろいろな子どもたちの姿を書くことになった。前は私が三十年以上前、子どものあそび場に興味を持ち始めた頃の体験を書いたが、これからは最近の子どもをめぐる問題を含め、そして子どもを通して見えてくるものも書いてみたい。

ところで子どもが沢山いるところ、集まるところといえば、今は幼稚園、保育所、小学校、児童館や学童クラブなどの教育機関や公的な場所、最近では幼児期から通うお稽古所や塾やスポーツクラブ。こうした所はどちらかといえば、行かなくて



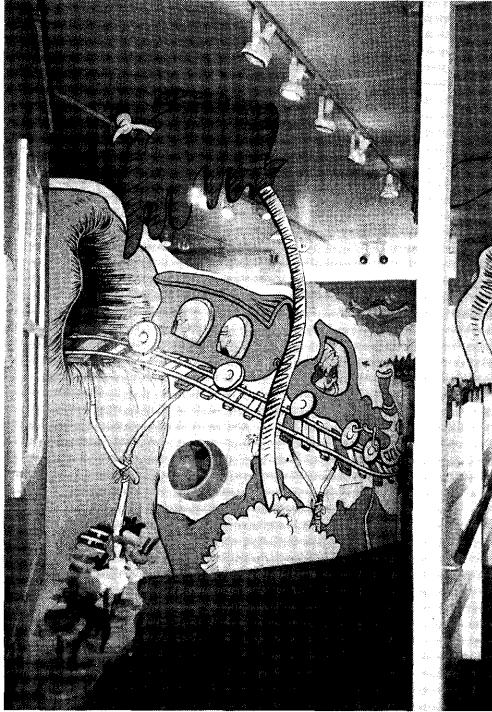
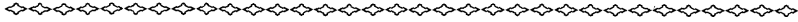
▲「マンハッタン子ども博物館」入口と筆者。あまりに地味な入口に、一度は通り過ぎてしまった。

はならない場所なのである。でも、もつと自由でエキサイティングなあそびや、もつと楽しいわくわくするような体験を期待して行く所といえば、まず公園や遊園地などがあげられよう。今回はそうしたあそび場について書いてみたい。

私たちのまわりにも沢山の公園がある。特に多いのはその地域の行政によって作られ管理されている児童公園である。ところが、身近にあるこの公園に人々はあまり興味をもたず、あることにさえ気づいていない人もいる。なぜだろうか。たしかにあまり子どももあそぶ姿をみかけない。勿論幼い子どもは親と一緒にくるのだが、親もまたそこであそぶ気分にならないようだ。何かが欠けている。滑り台、ブランコ、砂場、鉄棒、ベンチなどお決まりの固定遊具のいくつかが広さによつ



▲山を下る赤い汽車のすべり台。その側で、らくだのコブに乗ってあそぶ子どもたち。このエリアのプレイ・リーダーが、私のカメラを指さして「OK」と言ってウインクしてくれた（マンハッタン子ども博物館にて）。



▲前の頁の写真の場所を反対側から見ると、坂の下に穴があって、出入りできるようになっている。こういう仕掛けがいっぱいある。

て置かれている。しかし砂場は砂が固まったままであったり、最近では猫の糞尿などで汚染されているといわれて、放置された状態である。夏に日陰がほとんどなかったり、遊具が金属などで熱くてさわれなかったりする。

少し大きい公園では、少しでも広い場所があれば、大きい子どもたちが野球やサッカー、ドッジボールをしていて、小さい子どもがかけ回ったりする場所はない。時には、大人のゲートボールに占領されることもある。花壇があっても、子どもの摘み草はできない。都会では浮

浪者が住みついていたりする。こうして特に幼い子どももの居場所はますますなくなってしまう。最近では、児童館で午前中幼児が遊べるようになった。そこは安全で、そして親子ともに仲間ができる点ではよかったと思う反面、限られた建物や室内でなく、自由な開放された環境が、子どもたちの

あそびの場所には欲しい。

今日日本で子どもたちが行きたい楽しいあそび場、公園、遊園地といえば、ディズニースタジオ、ユニバーサルスタジオ、そして全国各地ちらこちらに造られている観光地、リゾート施設、各種のテーマパークである。

これらの多くは当然なことに入場料をはじめ、けっこうお金がかかる。公的な施設ではないから、当然である。しかもその大半は客集めや経営に苦勞していると聞く。だから料金は決して安くない。

しかし子どもたちにとっては、このような巨大な豪華な遊園地であそぶ日は、一年に数回の特別な



▲体の中を模した穴やすべり台やチューブであそぶ子ども。母親の許可を受けて写した。

日、つまり祭りとおなじハレの日なのである。そこで見えるもの、聞くもの、経験することすべてが、日常の生活にはない憧れや夢の世界であったり、刺激的でエキサイティングであったりして、その日一日、子どもはいつもの自分とちがう自分を体験す

る。徹底したウソッコの世界を、その場所に行きさえすれば楽しませてもらえるのである。このようなハレの日も時にはあつて欲しい。しかしここであそぶためには費用がかかる。そしてこのような有料のあそび場が、以前は子どもたちの自由なあそび場所だった空き地や里山や雑木林をけずり、造られていく。いま子どもたちが安心して、しかも思い切りかけ回ったり、冒険したりしながら仲間を作れる自由な場所が身近にあるだろうか。

今、安全のため、保護が必要だから、健全に育てるため、などの理由で、さまざまなバリア（どのように子どものためといても、普段、教育や福祉の各施設の中だけであそぶことが許されている状態は悲しい）が張り巡らされている。その中にしか居場所のない子どもたちのために、できることは無いのだろうか。たしかに多くの国が子どもを全く無防備な状態でおくことができない社会環境になつてい

る。その中で、消極的なやり方、つまり子どもをただ安全に囲うだけでなく、子どもたちが集まりたくなる、あそびたくなる、自分から動き出したくなる、魅力あるあそび場作りを実践している国もある。日本でも児童公園など身近な気軽なあそび場をもっと面白く楽しくあそべるところに変えてみたらどうだろうか。なによりも無料である場所があそび気にならない場所になっていることはもったいない、少子化と社会状況の悪化は日本だけではない。私が見た最近の欧米の公園や遊園地や子どもたちの施設を紹介しよう。

ニューヨークの子ども博物館で

見たこと、感じたこと

ニューヨークに日本の「こどもの城」と同じような施設があるときいて、数年前セントラル・パークに近い「マンハッタン子ども博物館 (Children's

Museum of Manhattan)」へ行ってみた。こどももの城のような立派なビルを想像していたのだが、予想に反して、まったくそのあたりの普通の小さいビルとかかわらず、私も一度は通り過ぎてしまった。しかし中に入ってみると、そこはアメリカらしい超モダンでコミカルな愉快なデザインと色彩にあふれた世界だった。丁度三、四歳から小学校低学年ぐらいの子どもたちが集まって、中年の女性からこの施設についての話をきいていた。周りには子どもたちにつき添ってきた大人たちが立って、同じように話をきいている。短い説明が終わると子どもたちは完全に自由。見て回る順序などのきまりはない。さっそくあちらこちらに興奮状態で散っていく。その後を付き添いの大人たちが、これも楽しそうに急いでついていく。この後、残念なことが起きてしまった。私がかメラを持っているのを見たその女性から、館内での撮影は禁止といわれたのである。今はそれが常

識になっている。注意しなくてはならない。結局数枚室内を撮ることを認めてもらえたが、子どもは避けるようにといわれた。

この館内はどこも狭いのに、その狭さを生かした面白さ、楽しさがいっぱいだった。例えば、人間の体の中がテーマになっているフロアーでは、消化器をサイケなホルムとカラーで表現していて、大腸にあたる部分を子どもが声をたてながらすべっていく。人形の部屋も、乗り物の部屋も、小さい子どもたちが大好きな、かくれんぼをしているような穴倉風、洞窟風になっていたり、思い切りニューヨーク風なアートでつくられていて、ここは博物館という知識を得るためのところというより、この場所からいろいろな刺激をうけて子どもがあそび出すところでもあることがわかった。低いトンネルをくぐったり上ったり、壁の穴を通り抜けたり、まるでびっくり箱の中であそんでいる気分のようなだ。

私も一緒になってあちらこちらあそび歩いた。驚きがいっぱい、冒険をしているようだった。しかも周りにあるものは、どれも手でふれたり触ったり、動かしたり使ったりできる。子どもが手荒く扱ったり、ふざけたりしてこわすのではと思ったが、そのような場面は見なかった。うれしさのあまり、ぎゅつと人形を手にはなさない子どもはいたが、そのくらいのことばかりまえ。床に座って友達と話をする子ども、一緒にあそぼうとお母さんの手をひっぱっていく子ども。ここを日本語で博物館と訳すのはおかしいとさえ思った。

少し広いごく普通の部屋をのぞくと、ちょうどある家族の子どもの誕生日のパーティが、子どもの友達を招待して開かれていた。室内に沢山の風船が浮かび、ディズニーの音楽がかかり、子どもと大人がにぎやかにケーキを食べているところだった。なお、博物館の内容は時々変わるようだ。しかし体験

型であることに変わりはないとのこと。そのほかに人形劇の公演があったり、少し大きい子どもたちは、テレビの仕事を経験できたりするようだ。

ニューヨークにはこの他に、ブルックリン子ども博物館などがある。ここは内部が改造されて、もつとユニークなつくりで面白いとか。欧米の子どもの博物館は一般に体験型である。見て勉強するといふより、自分でやってみる、試してみる、そして、あそぶのである。子どもをその気にさせることがいかに難しいか、保育にかかわる者にはよくわかる。こうしてみると、日本の子どものための施設は、真面目すぎて、面白みに欠けているのではないか。例えば、まず見せて、それをことばや文字でわからせようとする。子どもが触ったり手にしたり、動き出したり、あそびだしたり出来ても、制約も多い。またそうしたくなるような刺激を持つデザインやつくりより、大人が好むような見た目のよいデザイン

ン、大人に都合のよいつくり（どこからでも子どもが見える、危なくないなど管理面の重視や、見て読んで知識を増やすなど）が優先されてしまう。

しかも、子どもについてよく知らない人々が、自分の芸術的主張のために創ろうとする。なおニューヨークで感心したのは、どこでも付き添いの大人や施設のスタッフたちが、子どもに余計な手出し口出しをせず、しかしよく子どもの様子を見ていることだった。アメリカでは、場所によってはしっかりと子どもを見守る必要があり緊張する。どこでも大人たちが子どもにかまわずおしゃべりしている姿は見られなかった。特に戸外では親は幼児と手をしっかりとつないでいる。

ニューヨークにはビルの谷間にコンクリートだらけの金網で囲われた小さいあそび場が結構たくさんある。それだけでなく、セントラル・パークを始め、少し郊外にできれば、湖や林や草原など、野外で

あそべるところがたくさんある。勿論戸外のあそび場はほとんどがお金を必要としない。この博物館も入場料は子どもも大人も六ドル、会員であれば一年中無料である。マンハッタンのビル街だけが子どもがいるところではない。また、恐竜が大好きな子どもたちにとって、すごいエキサイティングなアメリカ自然博物館のような施設も多い。一度たずねて、そこであそぶ子どもたちのいきいきした姿を見てほしい。子どもはまず教えられるより、自分でやってみたいのだ、ということがよくわかる。

今、幼い子どもたちが安全に、しかも熱中してあそべる場を作ることが必要である。狭い建物であってもそれは可能なのだと感じた。そのために大人たちに求められていることは何か。考えてみたい。

（元宝仙学園短期大学）



障害をもつ幼児の保育(6)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

手を使うこと その一

F 前回まで足を使って歩くという話を話し合ってきたのですが、更に手を使うことに思いついたとき、足と手の違いはどこかと考えました。足を使って歩くことは、それによって自分の世界が広がる、そして手を使うことは自分の世界が深まることじゃ

ないかと思ったのです。それは今年の夏、孫の赤ん坊がうちに来ていて、一月半以上いました。その間に赤ん坊の世界がだんだん明瞭になるにしがって手を使うってことがはつきりしてきました。そのプロセスを見ながら私の感じたことなんです。そし

て以前に出会った障碍をもつ子どもたちの手を使うことと成長とに思いが広がりました。

手の機能は周囲の世界に対する感動から開かれる

M 見たものを手でつかむというのは赤ん坊の発達の上で非常に顕著なことです。それをよく見ていると手をつかむ前に赤ん坊は何かをじっと見つめているということがあります。手を使う前に赤ちゃんは何かに関心と興味を持つ。それは赤ん坊なりに心の中に何かイメージを持っているんじゃないかと僕は思うんです。それが何か光るものだったり、あるいは動き回るものだったり、それぞれの場合によつて違うでしょうけれども、関心を持った物に触れようという気持ちが出てきます。以前、僕は目に見えた行動上の発達しか気にとまらなかつたけれど、また新しく朝も晩も赤ん坊と一緒に生活してみると、さまざまの関心、興味が赤ん坊の中にあつて

初めて手を触れることが出てくるんだなあとということが分かりました。

F ええ。小さな赤ん坊が八ヶ月になったときに、ジーツとなにかを動かさずに見ているので、これはどうしたのかしらと思つて心配になつて後ろから顔をのぞき込んでみたら、その子は窓から差し込む木漏れ日がちらちらと揺れるのを陶然と見ていたのね。

私のがぞき込むと、赤ん坊のほうがはにかんだような「このちらちらするものはなんなの？」つていうように、私のほうに承認を求めするような顔をしてね、振り返つたんですよ。それで私は、この子に共感するように、「きれいねー」つて言いました。「あれが光というもの」「ほんとにきれいねえ。そうやって見ていてよかつたねえ」つていうような思いを込めてそう言つたら、赤ん坊がニコツと私のほうを向いてほつとしたような顔して笑いました。それで、これは新しくこの子の目に映つた、何か心にイ

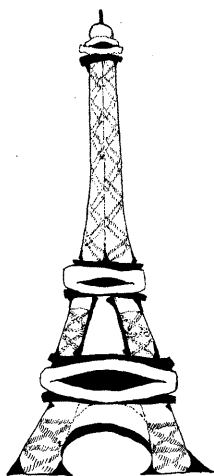
メーじしたもの、それをつかむことはできないもの
なんだけれども、確かに心を動かされていました。
その時はお座りをして見ていたんです。

M あなたはその話を聞いたときにね、僕はすぐに
乳児の古典的な発達研究のティデマンの育児観察記
録を思い出しました。それは嵐の後の黒い雲の隙間
から一筋の光がずっと差してきたときに、その赤ん
坊は感激してそれを眺めた。見るごとと感動とが、
伴っていることがその古典的な観察研究の中にあっ
た。これについては僕が『子どもの世界をどうみる
か』の中に書きました。

F 孫が生後十ヶ月になって、昨日うちへきたとき
に、その赤ん坊が台所の壁にちらちらと光る木漏れ
日を見て、片手でつかまり立ちして、もう一方の手
で木漏れ日を探っているのを見ました。自信をもっ
て得意そうにやっていました。もう以前の呆然とし
たような感激より一歩進んで、何かにつかまって光

を捕らえようとしている。同じ木漏れ日を見ても
一、二ヶ月経てばもうこんなに変わるんだって思い
ました。

M そうなつたときの赤ん坊は今度は見たものを何
でもつかんで引きずり出す、引っ張る。そういうこ
とが次々にもう数え切れないくらいあるもんだか
ら、親は目を離せないで追っかけて回っているよう
な状態ですよ。そして食べるものにも手を出すも
のだからそれまでは離乳食だといって大事にして
食べさせてもらっていたのが、もうそれじゃ待ちき
れなくなつてそのスプーンに手を出し、食べ物自体
に手を出して、それで親が音を上げるといような



ことになるんですね。

手を使うことは自我の発生につながる

M 愛育で保育していると自分でものを食べると言うようなことは、まだ到底できないような子どもが何人もいます。その子どもたちのことを思い浮かべると、いつもバギーに乗っていたり車椅子に乗っていたり。その子どもたちを見ていると、車椅子に乗りながらもある子どもは手すりを触ったり、握ったりしている。それを見て僕はこれを大事にしながらはと思いました。たまたま食事のときにご飯に子どもが手を触れたときに、僕はそれは「握る」チャンスだと思つてやらせてあげようとした。ところが、大抵のお母さんはそれはやらせてあげない。お母さんと話をしながらそのことがどんなに大事なことをか話し合いながら、長い時間かかって子どもが手を使い始めたとき、一歩先にいったように思いま

した。お母さんの気持ち、考え方とのやり取りの中ですることだから、こちらが主張して無理に進めることはできません。

F 手を使わないで人にやってもらうことはどう考えたらいいのでしょうか？

M その子どもの世界には自分に属するもののはつきりしない状態じゃないかと思う。霧の中のようであつて、あるものが自分に属するものか、他に属するものかというその境目がはつきりしないのでしよう。それが手で掴むことによつて、自分のものになる。これは一般論になつてしまうかもしれないけれども、自分の手を使うことによつて自分の世界に属するものができてくる。

F それは大事なことです。そしてまた手放すということが次の段階として出てくるのですから。

M それで先ほどの、いまうちにいる赤ん坊を見ていると、いろいろなものに関心が出てきて捕まえ

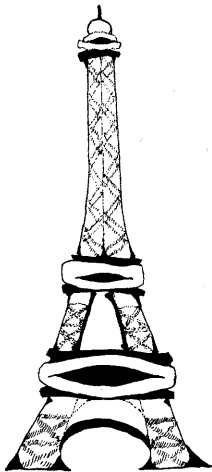
て、捕まえるとそれを引っ張る。引っ張るとい
は自分のほうに引っ張る。非常に原初的な自分とい
うものの発生と言えるんじゃないだろうか。

F ああ、なるほどね。おぼろげな世界にまだ生き
ていて車椅子やバギーに乗って登園してきた子ども
たちについて言うならば、まだそこまで開けていな
くて、霧の中のようって言われたけれども、霧の中
にいてまだ自分というものを意識していない。快不
快の感覚でしか意識していないときにみんなの中に
登園してくるわけですね。バギーに乗っていたI夫
くんは、卒業が近付いたある日、私とそのバギーを
押していたら、他の子が羨ましくなってその子の上
からもう一人座ってしまいました。そして二人に
なあって、初めはそれでもあまり感情を表現しなかつ
たのに、そのうちに前の子が邪魔になつたらしくI
夫くんが自分の手でその子を押し出して、追い払っ
てしまったっていうのを見ていて、ああ、子ども同

士で遊ぶ中ではこういうことも出てくるのかと感動
しました。

M 前に、手に持ったものを自分のほうに引き寄せ
ることが、自我の発生の根本だと言ったけれども、
手に持ったものを自分のほうに引き寄せるのではな
くて逆の方向に押し出すこともまた自我でしょう。

F そうでしょうね。自分で選択が出来るんだか
ら。この物は自分のほうへ引き寄せるが、何でもか
んでも引き寄せたいわけじゃなくて、やがて選択し
てこれは自分の世界に入ってきちゃ困るとか、これ
は自分の世界には取り入れたいとかっていうことが
いろいろ出てくるのでしょ。これこそが自我の発



生につながるのですね。

全身の機能を開く手―つかまり立ちに見る

M 愛育を卒業して若者となったI夫くんは、青年達のグループに来ていて、いま好調なんですよ。

先日窓枠につかまってじっとこちらを見ているI夫くんを見て、あれはだれかしらと、遠くからではI夫くんと分からなかったくらい、本当に驚きました。

F ああ、そう。立って歩けるようになったの？

M 自分で歩くってわけじゃないけれども立ってつかまって歩くことはもうかなり自由自在ね。そんなこと以前には考えられもしなかった。

F だからつかまるっていうことが本当にだいじなのね。

M そうだね。つかまることが基本だからね。

F 最近、お母さんと電話で話したとき、Iくんは

腰高の窓につかまって自分で膝立ちをして外を眺めるのを楽しんでいるそうです。青年部では調理実習で、包丁を持って御馳走を作ったり、お皿を洗ったりもするそうです。手でつかまることから世界がずっと広がって、生活の質が豊かになったのだですね。

M いま、うちの赤ん坊は手で食卓のへりにつかまって移動することを苦心しながらやっている。足が交差してしまったり、両足で踏ん張って立てなくても手の力が助けとなっている。赤ん坊も自分らしく生きることを頑張っているのだと思いました。

F I夫くんは物や道具につかまるよりも、人につかまるほうが好きで安心するそうです。それでお母さんが腕を横にして出すと、それにつかまって立つようになったと話してくれました。本当に人に対する信頼感を育てることがたいせつなのが分かりますね。

M 手の機能だけから言うと、愛育の子どもの何人かは行動は単純に見えても、内面の複雑さや繊細さは、赤ん坊とは比べものにならないものがあります。

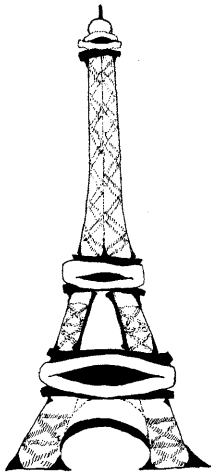
F I夫くんは手のひらが非常に敏感で、こんなに手を使うようになっても食事はお母さんに食べさせてもらっているそうです。これはいろんな子に見られることですが、どう考えたらいいのでしょうか。

M 僕はなんとかしてI夫くんにいろいろな触覚を経験させたいと思い、以前に砂場につれて行って座らせることを試みたことがありました。手を使わない子どもは逆に言うくとベトベトした触覚に対して非常に敏感な子どもだということを頭に置く必要があるということが分かって来ました。どこまでもその子の感覚を尊重し、それを表現できるようにすることがたいせつです。その表現の仕方が大人の考えや趣味に合わなくても、その子のやり方をゆるし、そ

の子が上向きに生きて行けるようにするのが保育です。

F そのデリケートさと自尊心を認めて、自分からやり始める日を待つのですね。

今回は身近な赤ん坊や愛育で出会った子どもたちの、手の使い方と成長の姿を通して手を使うことの意味について考えました。



無肥料、無耕耘栽培を “自然”に学ぶ

徳野 雅仁

野菜づくりをはじめたころ、畑で目にしたいくつかの光景は、不思議な感動をとまなべて心に焼きついています。そのなかのひとつが、畑の隅の通路脇で大きく育っているダイコンを見たときでした。タネをまき、生長を見守っていたダイコンではなく、こぼれダネによって発芽し、草に混じって気づかぬうちに大きくなっていったダイコンでした。すでに根の直径は七センチ、ややカーブを描きながら三十センチも地上にせり上がり、あきらかに畝で育つダイコンより見事に育っていたのです。ひき抜いてみるとゆうに五十センチを超えていました。耕さず、肥料も施さず、手入れもしていないのにと、なにか腑に落ちない妙な感覚を味わったものです。よく耕し、草を抜き、肥料をたっぷり施さなければ野菜は育たないと思いきんでいたからです。ひび割れたアスファルトの隙間に生える雑草と同じように、コマツナやカラシナもわずかな隙間に根を下ろして大きく生長し、舗道の割れ目に芽生えたアシタバがやがてコンクリートを持ち上げ、破壊しながら生長するという生命力の凄さも見せつけられたのです。

ある年に行ったキャベツの無肥料、無耕耘の実験栽培では、十数年雑草が生え、ムクゲの落葉が毎年堆積していた場所に、間引き苗二株を植え穴のみつくって定植してみました。ムクゲの葉が茂る春から半日陰になりますが、二株とも立派な生長を見せ、生き生きと瑞々しく、つややかな葉を

展開し、見事な結球を見ました。特筆すべきは、アオムシ、ヨウトウムシの発生が全くなく、土壌がこのように自然で、人が手を加えていない状態では作物も病気にならず、キャベツの放任栽培も可能となります。

土を踏み固めたり、雑草が生えない土地では野菜も育ちませんが、このケースのように自然に団粒構造が形成され有機質が堆積した土壌では無肥料栽培も可能で、肥料による土壌環境の悪化もなく病虫害の発生もなくなります。また、数年来、自然栽培を行ってきた場所での四葉キユウリの生長にも目を見張るものがあり、収穫を終え、九月に刈り取るまでウドンコ病すらでなかった記憶は忘れられません。

自然農のおもしろさを目のあたりに確認できたことがありました。それは、十三年間にわたって借りていた農園が閉鎖された後のことです。春に閉鎖後、農園は整地されて畑の面影は消えていましたが、三カ月後、鉄条網で囲まれた農園跡で、自然農を行っていた場所のみ青々とこぼれダネが育っていたのです。その年の秋にも。さらに、翌年の十二月にも見事に育つチンゲンサイやコマツナ、ミズナなど十種を超える野菜が病害虫を受けず健康に育っていたのです。およそ栽培中から最長で五年間、堆肥すら施していない土地で閉鎖後も作物は見事に育っていたのです。

(イラストレーター イラストも筆者)



日常生活の中のごころとからだ

宮田 敬一

はじめに

数年前、人生の半ばを過ぎた中年夫婦と受理面接のために、たまたま一度お会いする機会に巡り会った。そして、人生の後半から見て、子育てや家族の在りようをあらためて考え直させられた。同時に、そのような面接において、夫と妻が椅子に腰掛けている、その姿勢から、彼等の人生に対する生き様、

在りようを理解できるようにも思われた。人の日常生活における、身体的な姿勢、動作を通して、その人のこころ、世界観、おかれている状況を理解し、人生の書き直しを援助する道を模索したい。

ある中年夫婦の結婚生活

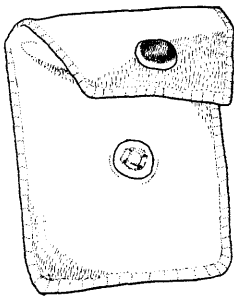
ある中年の夫婦が心理面接にやって来た。妻曰く、「主人が職場で女の人をかまっついて、仕事を

しないんです」。話のほとんどは妻がする。その妻によれば、ある地方都市で二人はこれまで数人の従業員を雇い、なんとか会社を経営してきた。しかし、不況で、経営がうまくいかず、自宅を処分し、田舎の小さな町で再び会社を起こした。三人の男の子どもたちは皆、成人し、職を得ていた。しかし、実家が傾き、子どもたちはそれぞれ自分の仕事をやめて家を手伝い始めた。いわば、「いざ、鎌倉へ」というように、危機に瀕して、家族はまとまったのである。そして、二、三人の女性パートさんと家族による新たな会社経営がスタートした。そこへ、降ってわいたこのエピソードである。

夫は妻の話をじっと聞いていた。その座っている姿は、背中を丸くし、肩をすぼめ、首を前につきだし、終始、うつむき加減であった。一方、妻は背筋を伸ばし、きりっとした態度で、理路整然と夫の至らなさについて言及した。そして、夫は、妻の話に

ほとんどなすき、肯定していた。夫は「もう自分でもどうしようもないんです」と言った。妻は、離婚を考えていた。しかし、「この年ですから」と、なんとかやり直したいという気持ちを述べた。夫は黙っていた。

二人とも誠実に、そして、一生懸命に人生を生きてきた人たちだと感じた。というのは、二人はずっと同じ職場で朝から晩まで共にし、懸命に力を合わせて会社を営み、三人の子どもたちもりっぱに育てあげたからである。夫は自らを「わがまま」であり、「子どもが生まれても、妻に子育てを任せ、自



分は一人だけ部屋に入り、これまで好きなことをしていた」と言う。結果的に、母と子どもたちの絆は強くなり、一方、父と子どもたちの関係は希薄になっていった。今、父は「子どもたちとどう接したらいいか、わからない」と言う。「子どもたちに気を遣い、言葉もかけられない」と言う。父は、自分が子どもたちから冷ややかな態度で見られていると感じていた。そして、これまでの子育てのつけが回ってきているように感じても、それに対して、どうしようもできない自分を見いだしていたのである。しかし、問題を感じて早々に二人が面接に訪れたということは、子離れの家族周期の中で、老後に向けて新たな夫婦物語をなんとか創ろうとしているように思われた。

姿勢に見る人生

人は心の中を見せなくても、姿勢はその人の生き

てきた歴史を表わすものである。人と環境との相互作用が如実に姿勢に表れるのである。いわば、多くのストレスを処理する、その個人的な独自のパターンが姿勢ともいえる。面接者には、前述の夫は本当に誠実な感じのする、しかも、ずいぶんと腰の低い人のように感じられた。彼は、対人関係の中で、そのような低姿勢を示すことで仕事を手に入れ、幾度もあったであろう、経営の危機を乗り越えてきたのであろう。唯一、仕事から解放されたひとときは、妻や子どもから離れ、自分の世界に入ることによって、彼は孤立するし、息子たちが会社にかかわってからは会社にも自分の居場所がなくなっていたものと推測できる。一方、会社の仕事と子育てに専念し、子どもたちがようやく成人した今、夫との老後を二人で楽しく過ごそうと思っていた妻には、何のためにこれまで苦労してきたのかわからないという

憤りがあるのも当然である。妻は子育てに悪戦苦闘しながらも、唯一、子どもと触れあう中で、仕事を忘れ、なんとか、こころの安らぎを得てきたのであろう。

人は身の危険を感じると自然にからだを丸くし、身を守るようにパターン化されている。人にはそのようなかからだを丸くするパターンが組み込まれているゆえに、ストレス下の対人的状況においては、反射的な運動とは異なるけれども、同様な丸くするパターンが出現しやすくなるのではないかと思われる。それは、人が環境に適應するために、上体を丸くする、より正確には、丸めるようからだを緊張させるという無意識的な試みといえよう。しかし、無意識とはいえ、力を入れているのは、紛れもなく、からだを丸くする主体である自分なのである。成瀬悟策先生（九州大学名誉教授）は、このような自分の意図（意識的であれ、無意識的であれ）に基

づいて、努力した結果、出てきた身体運動の過程を、単なる身体運動とは區別して、「動作」として定義づけてきた。そして、最近では、力の入れ方を変えろという主体的活動、つまりは主体者のこころを活性化する（自分でからだを動かしているという体験をする）ことで、心の安定を導く「動作療法」が、不登校、引きこもり、注意欠陥／多動障害（AD／HD）などの子どもたちや抑うつの人たちの心理療法として、成果をあげ、注目されてきている。

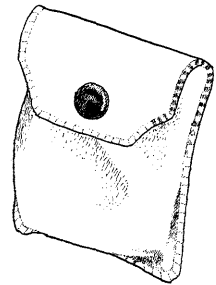
幼い子どもの頃の快い体験の蓄積と喚起

人は、人生の後半になって自分の子育てを反省するばかりだが、自分や世界に対して、悲観的になっているときは、だめな自分ばかりで、楽しい体験が思い出せない。前述の夫婦にもきつと楽しい体験があるはずである。親が若い時は、後になって親子の

楽しいつながりがいつでも思い起こせるほどに、子どもとの共有体験を多く貯蓄できるよい時期なのがある。

幼い頃、たいてい、子どもは親と一緒にお風呂に入ったたり、公園へ手をつないで出かけたり、川や海に出かけたりする。そのような体験の中で自然と、親と子の絆が形成されていくであろう。もちろん、外へ出かけなくても、子どもは、親と一緒に家でテレビを見て笑った経験、プラモデルを作った経験、すもうやプロレスをした経験、食卓で好きなおかずを親から余分にひとつもらった経験など、日常的に子が親とこころ暖かく接することができたことがいくつつかはあったであろう。

子どもは、最初につかまり立ちをし始めるとき、少しおしりを床からあげても、重くて、すぐにおしりから落ちてしまう。何度も練習するうちに、やっと、椅子の背につかまって立つことができる。しか



し、立った姿は、おしりの引けた、しかも、いわゆるガニ股立ちである。上手に腰に力を入れ、足で踏ん張らないとまっすぐに立てないのである。ひとり立ちしても、今度は、第一步を踏み出すことがたいへんである。たとえば、右足を一步前へ出すには、左足に体重をうまく乗せきらないと、右足は上がらないし、前へも出せない。そして、ようやく、ひとり歩きするが、今度は止まったりすることを学習しなければならぬ。また、子どもは、いつも、つま先に力をいれて歩くので、すぐに靴のつま先がだめになり、何足も買い換えることになる。そして、初

めの頃のガニ股での歩行は、やがてまっすぐな二本脚歩行に変化していく。子どもは、しっかりと、タテ方向にうまく力をいれられるように学習したのである。このような子どもの発達を親はそばで見ている。あるいは、子どもの様子を妻（夫）から聞いて、たいてい、我が子をほほえましく、そして、いとおしく感じるものである。また、その子どもの発達の様子が夫婦の共通の楽しい話題として出てくるものである。

新たな夫婦物語の創出のための援助

前述の夫婦にも、すっかり、忘れてしまっているけれども、二人で話した子育てをめぐる楽しい体験、なつかしい体験がたいいてい、あるはずである。一つ、楽しい体験が見つかると、糸のように、次々と楽しい体験が引き出されてくることがある。また、面接に親だけでなく、子どもたちも来てもらう、いわ

ば、家族面接をすることで、子どもたちに、これまでの子育てに注がれた親の暖かい愛情を理解してもらうことができるし、子どもたちから親との楽しかった体験を話してもらうこともできる。このように、面接に子どもが入ることで、面接者を含め、皆が親のすばらしい点を共有できると考えている。筆者は、ブリーフセラピーという、できるだけ短期間に、効果的に問題の解決をめざす心理療法をしている。それは、このような人や家族の中の肯定的な資源を信じ、それを引き出す援助にはかならないし、その中で、家族は自ら新しい物語を創出していつていると考えている。

（お茶の水女子大学）

ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む

(4)ブルデュー社会学における身体性と実践の論理

安田 尚

今回は「第四章 信仰と身体」と「第五章 実践の論理」を読んでみることにしよう。これらの章は社会学における行為論としては、きわめてオリジナリティの高いものである。なぜなら、従来の社会学が対象化でぎざぎざいた行為における身体と時間の問題に光が当てられているからである。実践が身体運動に担われていること、また時間が実践の意味を形成していることが述べられている。こうした実践にとって不可欠な要因であり、行為の

構成要素にほかならない身体と時間が、なぜか従来の社会学では見落とされ、「見えざるもの」になっていたのである。

科学とは「見えざるもの」「隠されたもの」

「検閲されたもの」の明示化である

ちなみにいえば、ブルデュー社会学が果たそうとした科学の使命は、こうした「見えざるもの」、「隠蔽された

もの」、外的あるいは内的な「検閲」に対する挑戦にほかならない。ブルデューは「おおい隠されたものについてしか科学は成り立たない」、つまり科学の任務は「隠されたもの」を明らかにすることであると主張している（註1）。関係や過程だけでなく、身体や時間も「見えざるもの」なのである。

第四章では、「場」に所属することは「場」の「身体化」であること。さらに、この場への所属⇨参加は意識化、対象化することなく「場」のルールを「信仰」（疑うことなく受容）すること。つまりそれは、「場」との一体化（⇨身体化）であり、「場」の価値（⇨賭け金、利害）やルールを信じることである。

「実践感覚とは「場の要求に対する先取りの調整」

さて、第四章の冒頭は次のようにはじめられている。「身体表象も世界表象も全く想定せず、ましてや身体—世界関係の表象も想定しない準—身体的な世界志向、何

をなすべきか、何を言うべきかが直ちに身振りや発言を命ずるが、こうした急迫性が押し迫ってくる世界への内在、このようなものが実践感覚であり、それが様々な『選択』を決定する」（一〇五頁）。

つまり実践感覚とは、身体や世界、さらに身体とそれととりまく世界との関係についての表象（イメージ）を媒介にすることなく、世界と直接対峙する「身体的な世界志向」だということである。「世界への内在」とは、世界の外側においてただ眺めているだけの気楽な立場に身を置いているのではなく、何かをしなければならぬ地位と役割を担っていて、十分に考える暇もない切羽詰った状態なのである。こうした「実践感覚」が、行為者の日々余儀なくされる「選択」を決定しているのである。

しかもこの「選択」は「熟慮されたものではないが、それでもやはり体系的であり、目的に照らして秩序づけられ組織されているわけではないが、それでもやはり一種の回顧的目的性を帯びている」（一〇五頁）。すなわ

ち、実践感覚がおこなう「選択」は、目的合理性にもとづいた合理的計算によるものではないが、にもかかわらず体系的であり、あとで考えてみれば何かの「目的」の追求であったがごとき戦略性がうかがえるほど「理に適った」選択をしているのだ。

このように実践感覚は、目的意識性の追及ではないにもかかわらず何かを達成しているわけだが、これがなぜ可能なのだろうか？ それは、実践感覚が「場の諸要求に対する先取りの調整」をしているからである。自分が参加している「場」（学校であれば「教育の場」であり、アカデミズムであれば「科学の場」、また芸術家にとっては「芸術の場」など）が求めてくるであろうことに実践を「先取りして調整」しているからである。

ゲーム感覚とは？

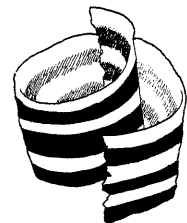
ブルデューはこうした実践感覚のニュアンスを理解するための好例として、スポーツ用語でいう「ゲーム感

覚」とよばれるもの（＝

「投資（運用）感覚」、^①「先取り」技法など）をあげている。これは、あえていえば「ゲームの勘」（註2）

とでもいえよう。明示化しにくい事柄ではあるが、たしかにゲームや勝負の過程では、ある種の感覚や能力が働いているといえる。

この「ゲーム感覚」は、身体化された歴史であるハビトゥスと客体化された歴史である場との出会いを理解する点で役立つものとされる。この「出会い」、つまり実践は、ゲームのあらゆる具体的形態のなかに刻印されている「未来のほぼ完全な先取り」を可能にする（一一一頁）。現在の中に察知して、やがて来るであろう未来を先取して反応するのが、ゲームのセンスであり、実践感覚である。これは、ブルデューによれば現象学のフッサールが「先把握」^②と呼んだものである。つまり「先把握



持とは、現在の中に刻み込まれている、ということとはつまり、すでにそこにあると了解され、現在の信憑的様態を帯びているへ来たるべきもの *à-venir* を実践的に目指すこと」である（註3）。

またこの「ゲーム感覚」は、行為者の主観から見れば「ゲーム経験の産物」であるが、同時にゲームの「客観的構造の産物」でもある。つまり、ゲームのセンスはゲームへの参加と、ゲームの体験を通して学習される。それは、「子供の遊びへの参加によって獲得される」のである（註4）。ゲームに参加するとは、そのゲームの「賭け金」、「利害」（＝損得）、ゲームの「前提」に同意することである。つまり、ゲームに身を投じている者は、ゲームでの勝ち負けを決める獲得対象（政治の場合なら「権力」であろうし、経済の場合なら「利潤」、芸術の場合であるなら「美」など）に価値を認め、ゲームの勝ち負けをさめるルールを承認しつつ、ゲームに打ち込む（投資する）わけである。

しかしこのゲームの例示にも限界がある。すなわちゲームにおける「場（すなわちゲーム空間、ゲームの規則、ゲームの賭け金など）」は、明白に恣意的で人工的な社会的構成物」である（一〇七頁）。これは「対自的ゲーム」、つまり自覚的に選んで参加したゲームであるのに対して、「即自的ゲームである社会的場」では、「意識的な行為によってゲームに参加するのではなく、ゲームの中にゲームとともに生まれる」のである（一〇七頁）。

したがって、「信仰・イリュージオ（錯覚、思い込み）・投資の関係は、それとしては自覚されないだけに一層全面的で無条件である。『認識コグニションするとは共にコ・ネクト生まれることである』というクローデルの言葉はここでは全面的に妥当する」（一〇七頁）。ある特定の場に生まれることによって身体化された実践感覚は、意識化されたり、言語化されたりすることなく文字通り身の内ウチとなって、その社会的場において機能するのである。何かを達成するた

めに手段として神を信じるというのではない信仰とか、他人から見ればこっけいな思い込みとか、何かに憑かれ入れ込んでいる状態などは、もはや意識化されることのないものである。

このような実践感覚の形成過程と「ゲームの学習」の関係は、「母語の学習」と「外国語の学習」との関係と同じである。つまり、「外国語の学習」が意識的な文法規則などの学習であるのに対して、「母語の学習」では「言葉を話すことを学ぶと同時にその言葉の中で（この言葉とともにではなく）考えることを学ぶ」のである（一〇八頁）。つまり、考えるという意識の根源を支えている母語は、身体化された言語なのである。

「実践の論理」と学問的知

ブルデューは第五章において、従来の学問の限界は実践を「機械モデルの言語」でしか語れない点にあるとしている（一二九頁）。たとえば、経済学は経営者を市場

に機械的に従属する者として、また民族学は行為者を社会的ゲームに参加しない存在としてしか語れない。つまり、従来の行為理論は行為主体の「実践の論理」を欠いた「機械モデルの言語」でしか実践を問題にできなかったというのである。「しかもその実践が外見上、特に機械的で、思考と言説の論理に対立する程度がより大きい場合、実践はネガティブにしか語れないのである」。

なぜこうした行為理論が横行してきたのだろうか？

それは「意識の言語と機械モデルの言語」という分類が、支配的な世界観の基本的な分類に対応していたからである。こうしてブルデューは次のように、従来の行為論に対する精神分析を試みる。「つまり、自らについて考える場合と他人（つまり他の階級）について考える場合を分けて、社会的世界についての言説を独占しようとする者たちは、自らに対しては進んで精神主義者であり、他の者に対しては唯物論者であり、自らに対しては自由主義者、他者に対しては統制主義者であり、そして

全く論理的に言つて、自らにたいしては目的論者、主知主義者、他者に対しては機械論者」（強調の傍点）安田。以下特に断らない限り同様）である（二二八頁）。

すなわちこうした二項対立は、自らには主体性をそして他者には機械的受動性を割り当てる学問的知のハビトウスが生み出したものなのである。

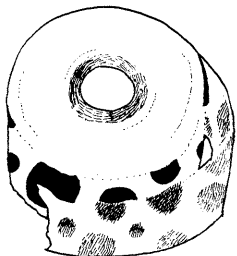
だから例えば経済学は、一方で「企業家」に対して「客観的チャンス合理的に評価する能力を」与える傾向と、他方で「自動調整される市場メカニズムに、選好を規制する絶対的力」を与えようとする傾向の「間を揺れ動いている」のである。つまり「経済学」は、一方で経営者に意識的な計算合理性を認めながら、他方で市場の論理の支配を認めるという矛盾した論理をもっているのである。また民族学者は、「交換という観念のもとに、ポトラッチやクラ」だけでなく、「触覚的器用さ（tact）、指使この機転、デリカシー、器用さ、ノーハウ」などの「実践感覚の言語で表現される民族学者自身

の社会的ゲーム」を考慮に入れていないので、もっぱら「機械論的モデルの言語」に頼ることになる。

「実践の論理」における時間

実践をその理論モデルと混同することは、「科学の時間」と「行為の時間」を混同することである。この混同は、「科学の時間と行為の時間とのアンチノミー、つまり科学の無時間的な時間を実践に押しつけて実践の破壊に行きつくアンチノミー」（二三〇頁）に陥ることになる。つまり科学がつくりだす実践の理論モデルからは時間が抜き去られているのに対して、実践には時間が決定的な条件として常に組み込まれているのである。実践は時間の展開の中でしか遂行されないことを忘れてはならない。

だから、「実践図式から



事後的に構築される理論的図式へと、実践感覚から理論モデルへ移行することは「実践の時間的現実をなすものを全て取り逃すことになる」。「これに対して、実践は時間の中で展開し、不可逆なものとして、共時化によっては破壊されてしまう相関的特性を全て備えている」

(一三〇頁)。

ここでブルデューがいたいことは、実践が時間と密接不可分な関係にあること、またここでいう「相関的特性」とは実践と時間是对応していることである。そして、実践に意味を与えるのがこの時間的特性である。すなわち実践のリズムやテンポ、また何よりも実践の方向性が実践の意味を決定するのである。このことは、音楽が「時間の芸術」であることを考えてみれば分かるであろう。

要するに、実践は持続性に内在しているので、時間と固く結びついている。さらに、実践が時間の中で展開されているということだけではなく、実践が時間を、とり

わけテンポを戦略的に使う点からもその結びつきは決定的である。

さて次いでブルデューは、学問的知の時間と実践の時間がなぜ異なるかを説明している。科学は時間を排除して実践を分析するのだが、なぜそうせざるを得ないのであろうか。それは、①「分析者はいつも遅れて「事が済んだ後に」やって来るので、到来する可能性のあることに不確かな気持ちでいることが出来ない」からである。

さらに②「分析者は、時間の効果を全体化する。つまり、それを乗り越える時間を持つからである」(一三一頁)。すなわち、学問的知が時間を排除せざるを得ないのは、その分析が常に「事後解釈」だからであり、さらに実践の全経過を一挙に見通す視点に立とうとするからである。だから、実践の時間はこの科学の時間とは全く異なるのだ。

たとえばゲームの場合を考えてみればよい。「ゲームに囚われている者は、彼が〔今〕見ているものではない

く、彼が予見しているものに、つまり直接今見ているものの中に在る予見されるものに自己を調整する」(三一頁)。たとえば、サッカー選手の放つパスを考えてみればよいであろう。仲間の今いるところではなく、これから向かおうとする地点に向かってパスはまわされるであろう。実践は来るべき未来に意味^サ方向^ンを見出すのである。

同時にそれは実践に急迫性をもたらす。すなわち「実践の本質的特性の一つは、まさにこの急迫性にある。この急迫性はゲームへの参加と未来を目の前にしている事の産物である」。だから「現実の世界、つまり現実に生きている世界を成している急迫性、呼びかけ、脅威、成り行きを消滅させようと思つたら、観察者のやるように、ゲームの外に、賭け金の外に身を置けばよいのである」。そうする者にとつてのみ「時間的継起が純粹な不連続として現れる」、つまり時間は止まる(二三二頁)。このようにゲームの参加者は、時間の意味形成力と時間

の支配(急迫性)に従属している。これとはちがつて、観察者や分析者の視点である学問的知は、実践の時間を「全体化」する。実践の時間を全体化するとは、実践を共時化して一気に捉えることである。

「一覽図式(学問的知)」と

身体図式(ハビトウス)

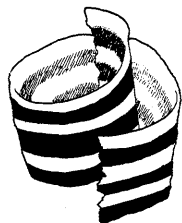
さらにブルデューは、身体化された分類図式であるハビトウスと、学問的知が説明や分析のために作り出す「一覽図式」の違いを明らかにする。このことを通して、ハビトウスの諸特性がネガティブ(否定的、陰画的)な形で浮き彫りにされる。科学は「実践の時間」の全体化(共時化、一覽化)、つまり無時間の「一覽図式」によつて生ずる効果を自覚しなければならない。その効果とは、分析者が現実の実践ではありえない等価や対立を、時間の全体化によつて累積・系列化する点にある。そこから、演技者の視点と見物人の視点を混同する

誤謬も生ずることになる。

そこでまず、科学がつくる「一覽図式」や「一覽表」を考えてみよう。この「一覽表」は、一連の流れの中でしか生起しえない実践を「同じ瞬間に見る」、すなわち「共時化」する。研究者は、その時々々に（一瞬々々に）しか語られないものを「累積し、系列化する」ことによつて「全体化の特権」を獲得することになる。その結果、重大な誤謬も生ずることになる。分析者は、「演技者と見物人の視点を混同する」（一三八〜九頁）ことになるからだ。だから研究者は、フィールドワークにおいて「実践が提起する必要があるから提起しない疑問」を実践者に投げかけ回答を得ようとする誤謬にも陥るのである。つまり研究者⇨見物人は、実践主体である演技者には思いも浮かばない疑問を突き付けるものなのである。こうして場合によつては、調査対象者は、予想外の質問に対する回答を即座に創作しなければならないことになる。

しかし、「実践の時間」

の停止によつて学問的知がつくる「一覽表」にもメリットがないわけではな
い。それをブルデューは



「全体化の特権」と呼んでいる。それは①実践的諸機能の中立化と②永続化（時間の廃棄）の手段（⇨フィールドでの聞き取り調査、文献資料の分析手段など）によつて可能となる。つまり①実践的諸機能の中立化とは、実践の諸機能である資本、場、地位などを中立化（無効に）する事である。つまり、見物人の視点から実践を見るのだ。たとえば「実践的投資の中断を前提として『理論的』質問をする状況の如き、調査が行う即自的中立化」である。また②永続化の諸手段とは、「文書や記録、分析のあらゆる技術（理論、方法、図式）」のことであり、調査や記録、分析では、「全体化の特権」が行使される。つまり、「時間的対立の完全な一列：

を、一つの空間に、そして同時に並べることによって、〔農業暦のような〕カレンダーは、実践においては決して遭遇することがないので論理的には矛盾することになるが、実践的には両立可能な異なったレベルの諸標識の間に、実に多くの関係（例えば、同時性、継起、対称性）を創作することになる。しかし実践主体は、こうした一覧表を決してつくることはない。なぜか？ それは、「時間は」異なる状況で異なる行為者によって、継起的に使われ、又生活の必要は一覧的な把握を要求しないし、また急迫性がこのような把握を断念させるから、一度に全部を動員させることはないからである」（一三四頁）。これに対して「一覧表、系統樹、歴史地図、相関表」などの学問的な図式やダイヤグラムは、「線形的連続をなして意味を表す実践」を「一目で同時に全体」を把握することを可能にする。また、サイン・カーブは「要素間の対立や等価の関係を表現するのを可能にし、観察者は、実践者が知る事のできない「多様な区分

や下位区分」を識別する事ができる（一三五―六頁）（註5）。

だから、実践には「論理学という論理」とは違う論理を認めねばならないのである。なぜなら実践に論理学的な論理を求めると、実践にもそれなりの首尾一貫性が在る事を見逃してしまったり、逆に不自然な首尾一貫性を押しつけたりしてしまうからである。

とはいえ、学問的な理論化にも意味が無いわけではない。それは実践の論理の特性をネガティブな形で示す事ができるからである。このネガティブな形で示される実践の論理とは、①実践特有の首尾一貫性、すなわち実践の統一性と規則性と②実践にもなうボヤケや「近似性」である。これらは実践の論理であるハビトゥスの一つの特性である。すなわちハビトゥスとは、「相互に関連し一つの全体を成す生成原理に基づいて、すべての思考・認識・行為を組織する」ものである。ハビトゥスが行使できるのは「論理の経済が単純性と一般性のために

厳密性を犠牲にするからであり、また論理の経済が『複
数定立』のうちに多義性の巧妙な利用の条件を見つけれ
るのである」(一四〇頁、註6)。

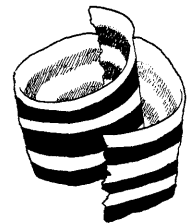
つまりハビトゥスは、それなりの首尾一貫性(客観的
条件と両立できると同時に、内在的に首尾一貫している
実践を産出できる)を保持しながらも、他方では「論理
の経済」に従って厳密性は二の次にして「ボヤケ」(ほ
ぼ、大体、おおよそのセンス)のうちに実践を組織する
のである。「論理の経済」は単純性と一般性を追求する。
その結果、実践には首尾一貫性と便利性がもたらされる
ことになる。

なぜか? 実践においては、実践の生成図式(ハビ
トゥス)が異なる領域や状況に対して適応、応用される
からである。しかもこの適用は実践主体には、意識され
ることなく行われる(一四一頁、註7)。実践はハビ
トゥスの多様な領域への応用である。領域も状況もち
がっているのに経済効率の高さから、「領域の取り違え」

とは気づかれずに、この適
用は実行される。だから論
理的には矛盾するこの適用
や応用が気づかれないまま
になされるのである。

ハビトゥスはこうした「不確かな抽象」の論理に従っ
て、モノの分類(「等価と対立」の決定)を「重層的
に決定」し、さらにこの分類図式を「転調」させる。

要するに学問的知から見れば、こうした「重層的決
定」や「転調」は、論理的な「区別と連関」を超越した
「領域侵犯」であり、定義なしの「不確実な抽象」(「
ボヤケ」)であり、何もかもいっしょくたにする「包
括的類似性」である。しかしだからこそ逆に、それは
「実践の論理」においてはその「便利性」(「論理の
経済」)や「急迫性」故に、効力を発揮する。この点に
こそ、身体化された分類図式であるハビトゥスの特質が
あるといえよう。こうして、日常的な実践が始終くり返



す「等価」と「対立」の決定、すなわち「あれとこれは同じだ」あるいは「いや違うな」と言った分類作業は、「意識と言説の手前で作用する」（註8）身体化されたハビトウス（＝認知、評価、行為の原理）の根幹を成すのである。

（上越教育大学）

註

1 ピエール・ブルデュー『再生産』宮島喬訳、藤原書店、一九九一年、一二頁。同様の文言は『社会学の社会学』（田原音和監訳、藤原書店、一九九一年、二〇頁）にもある。

2 国語辞典では勘とは「五感では感じないことを感じとる、一種の感覚・能力」とある。（『岩波国語辞典』、岩波書店、二〇〇〇年、二三五頁）

3 ピエール・ブルデュー『構造と実践』石崎晴己訳、新評論、一九八八年、二三頁。

4 同書、一〇二頁。

5 この点は『実践感覚2』の二二八頁を参照。

6 この実践における「ボヤケ」の問題については、『構造と実践』の二二六頁においても指摘されている。

7 ブルデューは「男Ⅱ乾と女Ⅱ湿」の「同一図式」が、家の「内と外」で論理的「一貫性を欠いて適用される例をあげている。「家は、外部から男の視点から見ると、つまり外部世界と対立するものとして捉えられると、女性的・湿っぽいものとされるのに対して、∴自律した世界として扱われると、∴男性的―女性的な部分と、女性的―女性的な部分に分けられるのである。」（一四一―二頁）。

8 ピエール・ブルデュー『構造と実践』石崎晴己訳、新評論、一九八八年、九九頁。



つながりを

生みだすもの・こと



伊集院 理子

幼稚園に入園してきて、多くの子どもたちは同年代の子どもと共に過ごす生活を初めて体験する。入園当初の子どもたちの様子は、十人十色である。遊具に引かれ、母親ともスムーズに別れ、どんどん遊び出す子どももいれば、母親と別れることに抵抗を示し、何日間も、事によれば一ヶ月近くも母親と一緒にいてもらいながら、どうにかこうにか幼稚園の環境に一人でいられるようになっていく子どももいる。保育者に対しても、早い段階で心を寄せて頼りにしてくれる子どももいれば、長い間心を開いてくれない子どももいる。友だちに対しても、それまでの体験からプラスのイメージを持って、積極的に関わろうとしていく子どももいれば、そばに他の子どもがいるだけで脅威で、不安定になって泣きわ

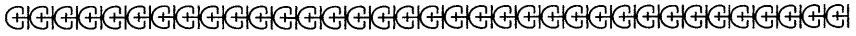


めいたりする子どももいる。

今年、三歳児クラスの担任になり、二十人の子どもたちと新たに出会い、十人十色の子どもたちのあり方を受け止めながら、「人と人がつながりあい、関わりあいながら育つ」状況はどのようにして生み出されていくのか、ということを考えながら、子どもたちと共に日々の生活を積み重ねてきている。いくつかの事例を通して、人と人がつながるといふことについて考えていきたい。

行為でつながる

入園当初A子は、母親と別れるのに抵抗を示したので、母親にも何日か一緒にいてもらった。少しそばにいてもらえば、安心して、絵を描いたり、自分でやりたいことを見つけて遊びだした。ある日、母親にしてみれば、付き添う日がいつまで続くのか、早く切り上げたいという思いもあっただろうし、その日は拠所ない用事もあったようである。「お母さんは幼稚園では遊べないの」と玄関まで追いつがるA子を置いて、母親は玄関の外に出てしまった。私は他の子どもの受け入れに追われていて、A子が玄関まで母親を追っていったことに気が付いていなかった。火が付いたような泣き声が玄関から聞こえてきて、私は事の展開を察し、A子を抱き上げなだめようとした。A子は、厳しく私の腕の中で抵抗して泣き叫び、体をのけぞらし暴れた。「お母さんを探す、探す」と言つて、玄関の外を指さす。子どもの気持に添う関わりを心がけているとはいえ、玄関の外に出るわけにはいか



ない。ごまかして「お母さんを探しに行こう」と保育室に戻ろうとすると、「あっち、あっち」と玄関を指差し、さらに大声で泣く。保育室にいる他の子どもものことも気になり、泣き叫び暴れるA子を抱きかかえながら保育室に戻る。

私と一緒にではなくては園庭に出られないB夫が待っていたこともあり、外に連れ出せば、A子も気分が変わって落ち着くかもしれないと考え、「お母さんをお庭から探そう」と言って、庭に出ようとする。そんなごまかしはA子には通用せず、あくまでも母親が出ていった玄関に続く廊下を指さして「あっち、あっち」と激しく泣き叫ぶ。ここまで激しく泣かせて連れ出すのはどうかと少しためらわれたが、どんなに泣き叫ぼうが、A子をしっかりと抱いて一瞬たりともA子と離れずに過ごそうと心に決めた。

待っていたB夫とともに山（園庭の築山）に向って移動しだしても、A子は相変わらず激しく泣いている。B夫が山に登る道に落ちている小さい緑の実をふと見つける。私がポケットから袋を出してB夫に渡すと、「あつた、あつた」といくつも見つけて自分の袋に入れる。A子は私の腕の中で相変わらず泣いていた。私が姿勢を低くして、階段状に山へと続く土留めの木の一つに座りこむと、近距離でB夫の様子が見えるようになり、小さい緑の実を拾うB夫の様子を見入るうちに、いつのまにかA子は泣き止んでいた。A子にもビニール袋を渡して、私が一つ拾って入れてみた。そして「Aちゃんも拾ってみたら」と





誘って、下に降ろそうとしても、降りようとしなない。すると、B夫が、A子の袋の中に自分が拾ったものをすっと入れてくれる。C子も山から下りてきて、「何をしているの?」と寄ってきてくれる。C子はちゃっかりどこで手に入れたのか、年長組用の外用ままごとのフライパンやスプーンなどをもって、お山の草や葉を「シチュー、つくっているの」と、せつせと混ぜたりしている。私がいくつか実を拾ってC子のフライパンに入れる。A子は、私に抱かれたまま、「あつた、あつた」と緑の実を指差すので、私は拾って、A子の袋に入れたり、B夫の袋に入れたり、C子のフライパンの中に入れたりしていた。すると、B夫、C子も見つけると自分のものにしたたり、それだけでなく、A子の袋の中にも入れてくれた。A子の袋の中にはいくつも緑の実が集まり、もうそろそろ降ろしても大丈夫かと考え、さりげなく何も言わずに降ろすと、A子は私の腕を離れ、すっと自分の足で立ち、B夫たちと実を拾い出した。

B夫やC子は、誰に言われたからでもなく、泣いていたA子の気持を受け止め、すっとA子の袋の中に実をいれてくれた。そのことが、どれだけA子を支えてくれたか計り知れない。自分も不安な気持を抱えていたB夫は、袋の中に少しずつ実を増やしていくことで、自分自身を一生懸命元気づけていたのであろう。B夫は、自分の気持と重ね合わせ、A子のために自分のできることを感覚的、直観的に感じ取って、素直にその行為をしてくれたのである。子どもたちは、このように、頭での理解ではなく、相手の今とつながるような行為をさりげなく担ってくれることがある。それが、人と人をつなげていく上で



大人の思惑を超え、大きな力になることをこの事例は教えてくれている。

D夫は、泣いている友だちがいると、すつと近づいてきて、自分のハンカチを出して、友だちの涙を

拭いてくれる。その行為を通して、泣いている友だちの心とつながろうとしている。「どうしたの?」とか、「泣かないのよ」とか、言葉で働きかけられるよりも、行為を通して働きかけられると、子どもたちはその行為を素直に受け止めて、働きかけてくれた人となりが持てるのである。子どもたちのふとした行為を通してつながり合う姿は、保育者である自分の関わりを見つめ直す機会をもたらしてくれる。言葉に頼りすぎずに、行為を通して、人と人がつながるといふことを、実践していけたらと思う。

狭い場所に共に入りこむ

五月も中旬になり、子どもたち同士、「いっしょ」ということを少しずつ楽しみ始めてきていた。E子、F子、G子が教卓の下にもぐりこんで、「もつと暗くして」と私に要求してくる。そこで、布地を取り出し、教卓の周りをカーテンのようにして覆ってみる。すると、その場所に惹かれて、H子、I子、J子も「入れて」と近づいてくる。E子は「だめよ」と即座に返すが、F子が「いいよ」と答えたので、E子もつられて「いいよ」と言い直す。J子は、机の下がもう満員で、机からはみ出した状態であったが、文句も言わず





に、入れてもらったことを受け入れて、はみ出しながらもどうか布地の中に入りこんでいる。E子は一度一緒に中に入ってみるが、中に入ることはこだわらず、五人がぎゅうぎゅうになって入っているため、すぐに外れてしまう布地を直す役回りを買って出た。E子がその後、ままごと道具をいくつか運びいれて、そのままごと道具をめくって、E子とJ子が取り合いになった。J子の思いは達せられず、J子が泣き出すことになったが、泣きながらも、J子はその場所を離れなかった。

狭い、周りから閉ざされた空間に身をおき、ひしめき合いながら、至近距離で身を寄せ合う体験は、日常の人との距離感と違って、一体感という密なつながりを子どもたちにもたらしにくれたのだと思う。日常の距離感では、自分がどうしても先に出てしまうE子、J子も一度はものの取り合いをしたものの、それ以外の時は、譲り合って一緒に過ごす人とながるということを体感していたのだと思う。

一枚のじょうがつなぐ

G子は、入園して一ヶ月くらい、自分で選んだ本を朝私に読んでもらうことから、幼稚園の生活を始めることが多かった。本を読んでもらうと安心して、自分なりに次の活動をみつけていった。G子以外にも、私に本を読んでもらうことで安心する子どもは他にもいて、時間を見つけてはそれぞれの要求に答えるようにしてきた。誰かに対して、本を読み出すと、いつのまにか子どもたちが集まってきて、押し合いへし合いになりながら本を見



ること、つながり合うことはよくあることであつた。

G子はその日、どういう訳かあまりいつもは選ばない電車の本を手にしてた。それは、K夫が大好きな電車の本であつた。K夫は鉄砲弾のような子どもで、朝来るとすぐ外に出て、面白いもの、ことを見つけると猪突猛進して即実行というように、幼稚園中に出没してとにかく色々のことを見て毎日精力的に過ごしていた。ほとんど自分の保育室には寄り付かず、お

帰り前ぎりぎりに保育室に連れ戻されてくるのが、その頃の日常であつた。その日はめずらしく朝少しの間保育室にいて、自分の好きな本を手に入れているG子を見つけ、「Kちゃんの本、Kちゃんの本」と言つて、無理矢理G子からその本を奪い取ろうとした。G子も人が持っているとは何でも「G子も」と、所有には人並み以上の執着があるため、相手がK夫であつても、そう簡単には手放さない。その時は実習生がクラスに入つていて、お互い譲らずキーキー泣き叫び合っている二人を前に、思案に暮れ、動きがとまっていた。そこで、私がごぞを手にして、「ここで読んでもらつたら」と園庭の入り口近くのたたきにごぞを敷いた。二人はすつと泣き止んでごぞに座つた。そして、実習生にその本を読んでもらつて、二人とも満足して、それぞれ次の活動に移つていった。

それぞれ本を読んでもらいたいという気持でいたのに、それが本の取り合いになり、ものの所有の方に気持が移つてしまつてた。ごぞを敷いて読んでもらつた場所を明らかにし





たことは、本来の本を読んでもらうということに気持の流れを修整することにつながった。それは、ござというものが、複数の人が一緒に座れるもので、そこに座れば自分の居場所が確保され、読んでもらいたい本を読んでもらえるということが、子どもの中にもすっと思い描けたからであろう。G子も、K夫も、魔法のように、ものを取り合う人から、一緒に見る人に変身して、二人はつながり合った。

我が園には、庭用ござと室内用ござが複数用意されている。ござの持つ人と人をつなぐ魔力は、他の場でも遺憾無く發揮されている。お山にピクニックに出かける時も持つて行く。そして、その時の気分で適当な場所に敷くと、そこが基点になって、ごちそう作り、山登り、アスレチックなど、それぞれの活動をしながら子どもたちがつながっていく。部屋でも、二つのついたての間にかければ、屋根付きの少し閉じた空間になり、たちまち、おうちごっこやお化け屋敷ごっこが始まる。人と人をつなぐものということをもっと意識して、保育の場できかしていきたいと思う。

今回は、行為、空間、ものということから、人と人がつながるということを考えてみた。ものをあげだしたら、次々書きたいことも出てきたが、今回はこのぐらいいにして、さらに実践を通して、行為を通してながら考えを深めていきたいと思っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

編 集 後 記

明けておめでとうございま
す。今年もどうぞよろしく願
います。

今年は、表紙絵を南塚直子先生
に、カットを彌水たえ先生にお願
いいたしました。一年間、どうぞよ
ろしく願います。

*

秋晴れの気持ちのいい一日がある
保育園で過ごしました。ひとしきり
外で砂遊びをした後、お部屋で絵を
かくことになりました。

「カブトムシをかきたい、でもかけ
ない」と泣きそうなS君に、そばに
いた先生が、「カブトムシ、見てく
る？」と誘いました。弾かれたよう

にS君はとんでいき、お気に入りの
虫の本を持って帰って来ました。ク
レヨンを持ってじーっと見入って
いますが、最初の一筆が下ろせま
せん。「角を、B君にかいてもら
う?」、横にいる先生がまた一言。
B君がYの字に角をかいて、その後
にS君がグイグイグイと力強く六本
の足をかきました。S君のカブトム
シができ上りました。

今度は「クワガタ」と迷わず自
分で角をかき本の虫の角の先の方
なでてから、「ハサミ、かける」と
ギュギュグッと二本の角の先にぎ
ざぎざをかき加えました。S君は大
満足でした。

菌ブラシの先のようにりっぱな角
の先を見ていると、これが、まさし
くS君にとつてのクワガタなのだ、
と思いました。

(A)

幼 児 の 教 育

第一〇二巻 第一号
(二〇〇三年一月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十五年一月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五-1-21-1

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四-九

☎〇三-五三九五-六六一三(営業)

☎〇三-五三九五-六六〇四(編集)

振替 〇〇-一九〇-二-一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレー

ベル館に願います。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。